

北海道の在宅高齢女性における幼少期の遊びに関する 語りの特性

Aspects of Stories about Play in Childhood among Older Women in Hokkaido:
A Text Mining Approach in Life History

小坂井 留 美
Rumi KOZAKAI

Abstract

The purpose of the present study was to describe aspects of childhood playing in life histories using text mining among community-dwelling older women in Hokkaido. The participants were 27 women aged 84.6 ± 3.0 years. They were interviewed about their life histories. All voice data were saved as text files. Text mining was performed using the IBM SPSS Text Analytics for Surveys ver. 4.0.1. The 298 target sentences were extracted based on the concept of playing in early life stages. The frequent words in the sentences were “brothers”, “boys”, “skiing” and “commuting to or from school”. After executing qualitative analysis, these words were interpreted as meaning that active movements had been considered “not girl-like”, and the participants found various pleasures in nature and basic motions such as running and walking in childhood. These results may help to understand the effect of experiences in childhood on the quality of life in later life among community-dwelling older women in Hokkaido.

I. 緒 言

生涯を見通したスポーツの影響を考える中で、筆者は高齢者の体験や意志を記録することに着目してきた。幼少期は、生涯スポーツの萌芽期として重要な時期と位置づけられているが¹⁾、幼少期の成育環境は、その心身機能への影響が高齢期にも及び²⁾、長期的な影響の理解に向けた研究が進められている³⁾。

昨年度筆者は、幼少期の家庭環境について60～80歳代の男性の語りを分析し、幼少期の語りは高年群で多く、家族に関する発言が多かったこと、幼少期の困難な状況にあって、「よく動くこと」、「作り出すこと」等の活動があったことを示した⁴⁾。しかし、女性については十分な検討に至っていなかった。高齢女性の幼年期を捉える場合、男性に比べて運動の経験が少ないこと⁵⁾、幼年期についての

語りでは、「運動」の語では体験を捉えにくいこと⁶⁾が課題となる。これまでの検討から、「遊び」の語は身体活動や好みなど意思の表出に関連していたため、女性の幼年期の生活環境全体を捉えるために「遊び」の語に着目するという考えに至った。

そこで、本研究では80歳代の在宅高齢女性のライフヒストリーインタビューから、幼少期の遊びに関する語りの特性について、テキスト分析と発言内容の検討から明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 方法

対象

本研究の対象者は、「高齢者のライフヒストリー分析による生涯発達過程での運動の意義と影響に関する研究」に参加したに北海道A市在住の高齢者94名（平均年齢±SD：77.8±8.0歳）のうち、分析焦点者とした80歳代の女性27名（84.6±3.0歳）であった。対象者全体の調査参加までの詳細は、先行研究を参照されたい⁶⁾。調査に際し、全員に対してインフォームドコンセントを行い、同意書を得た上で調査を実施した。本研究全体は、北翔大学大学院・北翔大学・北翔大学短期大学部研究倫理審査委員会の承認を受けている（承認番号：HOKUSHO-UNIV:2013-007）。

分析項目

1) ライフヒストリー

対象者の基本属性（性・生年月日）、人生年表作成項目（年齢、西暦、家族、学校・職業歴、居住経歴、社会・歴史的出来事、ライフイベント、転機となった出来事）と、運動

経験（種目、活動名、頻度とその開始、中止、継続、発展時期）、環境・文化要因（自宅周辺環境、寒冷・気象状況、慣習や服装、地域行事）、現在の生活状況、将来の希望を主とするインタビューを行った。インタビューは、現在の生活状況を聞いた後、生まれた頃の様子から年齢を上がる順序を基本として進めた。その他のインタビュー方法とテキスト化については、先行研究と同様の方法で実施した⁶⁾。

2) テキスト分析

本研究では、ライフヒストリーについてテキスト分析を行った。分析には、IBM SPSS Text Analytics for Surveys ver. 40.1を用いた。分析手順は、はじめに分析対象者全27名のインタビューデータを句点（一文）毎に1レコードとして全発言を読み込み、デフォルト条件においてキーワード抽出（形態素解析：文節を基とした自立語の抽出）と感性分析を行った。

次に本研究の主題である「幼少期の遊び」についての発言を抽出するため、「遊び」のカテゴリ分類器を設定し、抽出された全キーワードからキーワードの絞り込みを行った。

絞り込まれたキーワードを含む一文を基本の分析レコードとしたが、一文だけでは情報が限られ意味の取れない場合があった。そのため、キーワードを含む全ての文は、全発言データにもどり前後に関連する文を含め一つの出来事として理解できる文章単位として再度抽出した。文章単位で抽出されたレコードを元に定性的検討を行った。

尚、本論文では、考察において言葉に着眼する必要性を考慮し⁸⁾、大島⁷⁾の方法にならない結果と考察をまとめて記すこととした。対

象者の語りは斜体で記した。

3) 心身状況

現在の心身状態について確認するため、質問紙による健康関連QOL (MOS 36-Item Short-Form Health Survey : SF-36)⁸⁾、抑鬱 (The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale : CES-D)⁹⁾、認知機能 (Mini Mental State Examination : MMSE)¹⁰⁾ をインタビュー前に検査した。

Ⅲ. 結果と考察

基本特性

表1は、対象者の心身状況特性を示した。CES-Dでは16点、MMSEでは23点が、それぞれ抑鬱傾向、認知機能低下のカットポイントとされるが、これを下回った人はCES-Dで7名 (28.0%)、MMSEで2名 (7.4%) であった。本研究では基本的な会話が成立していたこと

表1 対象者の心身状況特性 (n=27)

	平均値	標準偏差
調査時年齢 (歳)	84.6	3.0
CES-D (点)	10.3	9.6
MMSE (点)	27.3	2.1
SF-36 (点)		
身体機能	62.4	29.5
日常役割機能 (身体)	65.0	35.9
体の痛み	60.2	27.6
全体的健康感	64.0	20.8
活力	63.4	22.6
社会生活機能	83.8	23.7
日常役割機能 (精神)	72.5	28.6
心の健康	73.7	23.6

SF-36; MOS 36-Item Short-Form Health Survey, CES-D; The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale, MMSE; Mini Mental State Examination

から、27名全てを分析に含めることとした。

健康関連QOLを表すSF-36では、日本語版の2007年国民基準値では80歳以上のデータがないため、各下位尺度別に70-79歳女性の平均値¹⁰⁾との差を確認した。身体機能と日常役割機能 (身体) では約10点程度低値を示したが、全体的健康感では約6点、心の健康では約3点程度高値を示していた。対象者は、身体機能の低下は見られるが、概ね良好な健康状態を有していたと考えられた。

キーワード抽出

対象者の全発言を用いてキーワード抽出を行った。「遊び」について抽出したキーワードは、表2の通りであった。尚、ひらがなやカタカナによる表記の揺らぎはない。全106

表2 抽出されたキーワード

カテゴリ	抽出語	レコード数
遊び		106
	遊ぼう	1
	遊んでいます	1
	遊ぶこと	2
	遊んでいた	7
	遊戯	2
	遊びました	1
	遊びながら	1
	遊び	32
	遊んでいました	2
	遊ぶ	26
	遊んだり	1
	遊び場	1
	遊んだこと	1
	遊び放題	1
	遊びに行ったこと	1
	遊んであげる	1
	遊んだ	7
	遊んでいること	2
	遊びに行った	2
遊んで	12	
遊んできても私よりも全部いい	1	
遊ばせておくこと	1	
遊びに行ったり	1	
遊んでいる	1	
遊ぶとき	2	
遊びたかった	1	

レコードについてテキストデータに戻り各発言の内容を確認したところ、大人になってから暇にしていることを「遊び」とする表現や他人のできごとが含まれていた。これらを除く71レコードを分析に用いた。尚、「遊び」に関する語は23名から抽出でき、4名は抽出できなかった。

次に、71レコードを中心に関連する文章単位でのレコードを再抽出し、298レコードを用いて頻出語を検討した。

遊びに関わった“人”、“物”、“場所”に着目すると、“人（レコード数）”では、「兄／兄弟（12/3）」や「男の子／男（8/6）」など男性に関する発言が多かった。次に「友達（5）」、「妹（5）」が続いた。“物”では、「スキー（19）」が最も多く、次に「手玉（5）」、「あやとり（4）」であった。“場所”では、「学校（15）」が最も多く、「行く（18）」、「帰る（17）」も頻出していたことから、「学校の行き・帰り」と解釈できた。次に「川（7）」が続いた。

これらの語を含む語りを定性的に検討したところ、活発に遊んだことの表現に「男の子と一緒に遊んで遊ぶ」が見いだせた。

・・・男の子の後付いてブドウ蔓くぐったりなんかしてでも、本当に夕方暗くなるまで、おてんばで遊んでいたけど、・・・

・・・そして遊んできて、そして兄と一緒に帰ってきて。それは小学校のときは兄が陸上やっていたからね。・・・

また、上記下線に示したように「おてんば」、他にも「負けん気」、「意地っ張り」といった語も合わせて見られ、女の子が活発に活動す

ることに対して、特別さを意識していた様子が伺われた。

物に関する語で「スキー」が上がったことは、北海道の道央部の特性をよく示し、冬の遊びの代表であったことがわかる。一方夏の遊びについては、「ゴム跳び」、「陣取り」等も上がったが各語の出現頻度は少なく、様々な遊び方、名のない遊びに分散したと考えられた。名のない遊びの表現の一例を以下に示す。

・・・もう冬はスキーに乗って、ワンワン遊んでいたし、夏になったら、あんた、どうか知らん、駆けずり回ってあっち行った。・・・

・・・秋になるとみんな枯葉で木が見えるもんですから、そこ行って山の上行って尻滑りした。・・・

また、話が直接繋がらず今回の抽出では分析に含めることができなかったが、場所や「遊び放題」の語に関連した別の箇所以下のような語りが続いていた。

・・・帰りはずっとね。30分以上は1人で川辺の道をね。だから、もうトンボが友達。野の花の名も知らないのが摘んだり、花束こしらえたりしながら。でも、やっぱり子どもの頃に不思議だなと思いましたね、今思えば。お日さまと雨が降って濡れるだけなのに、いろんなお花があるでしょう？ どうして、こう違ったのになるのかなと思いますながら、そんなことを考えながら、のんびりと。・・・

学校帰りのいわゆる道草に、一人遊びや思索の豊かな時間を見いだすことができる。

一方で、最も頻出した語は形容詞としての「ない(32)」であった。この中には「遊んだ記憶がない」を示す語りも含まれた。

・・・少しは遊んだ記憶はあるけど、そんなうちへ帰って遊ぼうなんて思ったことはないですね。・・・

・・・その間はずっとお兄さんの子どもとか、家の手伝い。遊んでくることは一切ないです。・・・

「米とぎやご飯炊き」、「ランプ磨き」、「草取り」などの語が合わせて見られ、兄弟姉妹で役割分担があり、家の手伝いで忙しい様子が語られた。今回「遊び」の語が抽出できなかった4名も、働きづめであったことや戦争中の苦労が幼少期の支配的な語りになっていた。

一方、手伝いに関しては、手伝い自体に楽しみを見いだす語りもあった。

・・・「きょうは、おイモの花が咲いたから、あれを全部、摘みなさい」とか。ジャガイモの花摘みとか。遊びながら、そういうことを。・・・うちの手伝いが遊びの一貫だった。・・・

・・・遊びね。私ら子どもの、妹や弟たちの面倒を見たから。あやとりとか？あと何あったかね、あの頃でね。・・・

畑などから野菜や果物を採ったり、年下の姉妹の子守をしながら遊ぶ様子も語られた。

IV. 総合的考察

本研究では、北海道の80歳以上の女性を対象に、幼少期の生活環境について遊びの語りに着目したテキスト分析による定量的解析と発言の内容の特徴を検討した。その結果、活発に遊ぶことは女の子として特別な気質と捉えていたこと、自然や生活活動の中での遊びが特徴づけられた。手伝いが忙しく遊んだ記憶がないという語りも、この世代の幼少期を特徴づけると考えられた。

女性が幼い頃から「女(の子)らしく」と社会的な圧力を受けていることは、これまでも指摘されている¹¹⁾。本対象者では、外で活発に遊ぶことは男の子のようになること、やや特別な気質をもつこととして語られた。楽しい遊びの描写ながら、「女(の子)らしく」が求められた社会風潮が受け取れた。本研究は、幼少期の環境が高齢期の健康に及ぼす影響を明らかにすることを目的としており、ジェンダー課題の探求は目的としないが、このような風潮は生活環境の一つと捉えられた。

遊びの内容として、スキーを含め周囲の自然で遊んだ様子は、約70年前の環境についての新しい知見ではないが、その中で、どう遊んでいたかの描写は興味深い。男性を対象とした先行研究で「名のない遊び」が「人気の遊び」になる様子を示したが⁴⁾、本研究でも「走る」、「滑る」、「歩く」といった基本的な動作に楽しみを見いだしていたことが伺われた。また、手伝いはネガティブな表現とも結びついてきたが、遊びと一緒だったとの表現もあり、「遊びをみつける」過程に運動不足が指摘される現在の子ども達への示唆があるように思われた。

家の手伝いの支配的な語りとしては、男性の先行研究では「苦労を当たり前として受け止めていた」、「よく動いていた」との自負になっていると捉えたが⁴⁾、女性においては「遊んでいられないほど」に繋がる表現が目立った。家にあつて「暇をしていること」を良しとしなかった雰囲気が伺われた。前述の社会的風潮やこのような家庭の雰囲気は、この時期の後年への影響として小さくない。幼少期の困難な状況 (Early life adversity) は、中高年期以降の健康阻害と関連するが¹²⁾、困難な状況にあつても家庭の温かさや慈愛を感じている場合は、この関係が減じることも指摘されている¹³⁾。本研究対象者は、戦争 (対象者らの多くは「大東亜戦争」で表現) を経験しており幼少期に困難な状況にあつたが、現在の健康関連QOLは比較的高く保たれ「今が一番幸せである」実感を持つ人が多くあつた。経験への感じ方などで、その後の経験や健康に差があるかについて今後分析を進める必要がある。幼少期の生活環境を丁寧に掘り起こし、一般地域住民の生涯にわたる健康づくり推進への一歩としたい。

V. 要約

本研究では、北海道の在宅80歳代の女性27名を対象としたライフヒストリーインタビューから、幼少期の遊びの語りについて特性を検討した。高齢女性における幼少期の遊びの語りは、活発に遊ぶことを特別に捉えていたこと、自然とのふれ合いや生活動作の中に遊びを見いだしていたことが特徴づけられた。手伝いが忙しく遊んだ記憶がないという語りも、この世代の幼少期を特徴づけると考えられた。

研究助成

本研究は、JSPS科研費JP17K01864の助成を受けて実施した。

謝辞

本研究にご参加いただいた対象者のみなさま、調査を進めて下さったA市地域包括支援センター職員のみなさま、インタビュースタッフのみなさまに心より感謝申し上げます。データ整理に協力いただいた本学学生にも感謝致します。

文献

- 1) 日下 裕, 加納 弘. 生涯スポーツの理論と実際: 豊かなスポーツライフを実現するために. 改訂版: 大修館書店; 2010.
- 2) Birnie K, Cooper R, Martin RM, et al. Childhood socioeconomic position and objectively measured physical capability levels in adulthood: a systematic review and meta-analysis. *PLoS One*, 6:e15564, 2011.
- 3) Kuh D, Karunanathan S, Bergman H, et al. A life-course approach to healthy ageing: maintaining physical capability. *Proc Nutr Soc*, 73:237-248, 2014.
- 4) 小坂井留美: 北海道の在宅高齢男性における幼少期の家庭環境に関する語りの特性. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 9, 133-139, 2018.
- 5) Kozakai R, Ando, F, Kim, HY, Rantanen, T, Shimokata, H. Regular exercise history as a predictor of exercise in community-dwelling

- older Japanese people. *Journal of Physical Fitness and Sports Medicine*, 1:167-174, 2012.
- 6) 小坂井留美, 永川ひとみ: 北海道の在宅90歳以上高齢者における子ども時代の運動の発言特性: ライフヒストリーを用いたテキストマイニングからの検討. *北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要*, 7:213-222, 2016.
- 7) 大島聖美: 中年期母親の子育て体験による成長の構造: 成功と失敗の主観的語りから. *発達心理学研究*, 24:22-32, 2013.
- 8) 福原俊一, 鈴鴨よしみ: SF-36V2 日本語版マニュアル. 京都: 特定非営利活動法人健康医療評価研究機構; 2004.
- 9) 島悟, 鹿野達男, 北村俊則: 新しい抑うつ性自己評価尺度について. *精神医学*, 27:717-723, 1985.
- 10) 下方浩史, 編: 高齢者検査基準値ガイド 臨床的意義とケアのポイント. 東京: 中央法規; 2011.
- 11) Schutzer KA, Graves BS. Barriers and motivations to exercise in older adults. *Prev Med*, 39:1056-1061, 2004.
- 12) Birnie K, Martin RM, Gallacher J, et al. Socio-economic disadvantage from childhood to adulthood and locomotor function in old age: a lifecourse analysis of the Boyd Orr and Caerphilly prospective studies. *J Epidemiol Community Health*, 65:1014-1023, 2011.
- 13) von Bonsdorff MB, Kokko K, Salonen M, et al. Association of childhood adversities and home atmosphere with functioning in old age: the Helsinki birth cohort study. *Age Ageing*, 48:80-86, 2019.

